

# 音は語る

文藤盛一朗



連載 48

## 光の存在伝えたシテイ・フィルの《復活》

### アントネツロは《レクイエム》の祈り深く

合唱団が立ち上がった。一斉にでなく、ばらばらと。演出された動きだろう。墓所に眠っていた者たちが、よみがえる。ドイツ語の歌詞 *aufstehen* (復活する) は、「立ち上がる」という動きをはらんでいる。

#### 安らぎを先取りする旋律

東京シテイ・フィルハーモニック管弦楽団は、常任指揮者の高関健が指揮し、創立50周年を記念する公演にマーラーの交響曲第2番《復活》を選んだ(3月31日、サントリーホール)。暗から明への一直線の物語ではない。壮絶に始まる第1楽章も、すぐに終楽章の復活や、復活したその先に待つ絶対平和としての安らぎを先取りする旋律が現れる。マーラーが「海の静けさ」と呼んだ風のようなホ長調



マーラーの交響曲第2番《復活》を演奏する高関健指揮東京シテイ・フィル ©K.Miura

旋律の指定は、ピアノ三つなど弱音指定が細かく施されている。楽章の半ばに現れるなだらかなウィーン風のトランペットや、ヴァイオリンの温かな響きにもことのほか注意が向けられ、雲間からのぞくような光を聴く者に伝える。

第3楽章の終止は神秘感が深まり、特別な第4楽章への移行行きを準備するのにもふさわしい。マーラーは、その楽章の冒頭に「とても厳かに、だが素朴に(コラール風)」と記した。アルト(この日はメゾ・ソプラノの加納悦子)が歌う詩に照らせば、原光とふつう訳される表題の *Uchit* は、「根源的な光」と捉えると分かりやすい。それは、「親愛なる神が私に授ける灯火」であり、「永遠の至福の生へと道を照らしてくれる」(三ヶ尻正訳を基に構成)。高関は演奏前のプレトークで、「指揮者でもあったマーラーの細かな指定を徹底的に尊重する」と語ったが、その言葉通り、演奏が進んでくると、この楽章は、深く心に根差した嘆願の祈りであることがしみじみと伝わってくる。

#### よみがえりを可視化

その祈りに対する答えのように、終楽章の第5楽章は、キリスト教信仰に基づく「最後の審判」が演劇的なまでに描かれる。キリストがこの世に

再臨する時に、呼び出しのラッパが鳴る。その時死者は復活し、裁きに臨む。合唱団(東京シテイ・フィル・コーア)がこの日立ち上がったのは、その場面を可視化する。「復活するのだ。そう、私の体だった塵よ、お前はつかの間の休息のち復活するのだ。不死の生だ! お前を呼んだ方がお前に不死の生を与えてくださるだろう」。

ソプラノ・ソロ(森野美咲)は歌う。「信じよ、お前は意味もなく生まれたものではなかった! お前の生も苦悩も無意味ではなかったのだ!」。優れたこの日の演奏は、こうした希望のメッセージをしっかりと聴く者に伝える。2台のハーブからはマーラーが安らぎのイメージと重ね合わせるカウベルの音が聴こえたように胸をつかれた。終結では教会風の鐘の音が新鮮に聞こえた。その音の素朴さは、マーラーが第4楽章の演奏指示として書き込んだ「素朴に」と通底する。

高関と東京シテイ・フィルの細部の作り込みは、木をみて森を見ずの対極だった。作曲家の意図や指示を徹底して尊重することで、《復活》の全体像が鮮やかに再現された。創立50周年の見事な果実である。

#### 41番のフーガにみる信仰心

復活と永遠の生命を主題にしたマーラーの交響曲第2番の初演は18



《レクイエム》を演奏する濱田芳通指揮の「アントネツロ」 ©松尾淳一郎

交響曲第41番《ジュピター》と組み合わせる異例の形で《レクイエム》を演奏した(3月28日、第一生命ホール)。前半の41番はルバートが多用され、

テンポがよく動いたが、奇をてらうのではなく、濱田がそうと信じての表現だと分かる。すぐに耳は慣れ、自然に聴こえるのは、演奏に説得力があるからだろう。会場販売冊子の「演奏ノート」に、濱田は41番終楽章のフーガにモーツァルトの信仰心をみていることを記していた。その主題はグレゴリオ聖歌から生まれた讃歌から借用され、《ミサ・プレヴィス》のクレドでも用いていることを論拠にしており、同様にフーガが多用される《レクイエム》との「二本立て」にはしっかりと一本の線が通っていると分かる。

#### 地獄と祈りのコントラスト

《レクイエム》ではとりわけ、中川詩歩、中山美紀、中嶋俊晴、田尻健といたった歌手たち17人が歌う合唱が非凡だった。ソロを担う力量を持つ人たちの声が交じり合い、溶け合い、それでいて一人一人の声の集まりであることが感じられる。頂点は、セクエンツィア第5曲の「コンファテイス」(黙の業火を歌う男声(各4)のフォルテの躍動。続くソプラノ(5)・アルト(女声と男声各2)のコントラスト。ソプ

ラノ・アルトはソット・ヴォーチェの弱音で「祝福された人々とともに私を(天国に)お呼びください」と救済を嘆願する。

そして、曲はモーツァルトの絶筆、「ラクリモーサ」(涙の日)へ移っていく。第5曲とこの第6曲は一对である。「涙の日」とは、裁きを受けるためのよみがえりの日。マーラーとは異なり、モーツァルトは地獄落ちの淵に立ちつつ、「その日には私をお救いください」「彼らに安息を授けてください」と祈りの音楽をつづろうとして絶筆となった。劇的表現に満ちた管弦楽の演奏とともに、作品の感動がますます心に伝わってきた。

#### 川口成彦ら古楽の《大公》《皇帝》 澄ませる耳伝わる感動

フォルテピアノの川口成彦と丸山韶ら5人の古楽奏者によるベートーヴェンの「大公&皇帝」演奏会(3月20日、東京・狛江エコルマホール)についても記したい。1825年ウィーン製のフォルテピアノの響きは、モダンピアノに比べれば、か細い。第2ヴァイオリンやチェロ、ヴィオラ、ヴァイオローネが加わったのピアノ協奏曲第5番《皇帝》(室内楽版)のアンサンブルの響きも、会場の乾いた音響特性もあって豊かとはいえない。だが、文字通り耳を澄ませる中から、《大公》



ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番《皇帝》(室内楽版)を演奏する川口成彦ら出演者(狛江エコルマホール提供)

第3楽章の星の降るようなきらめきやカンタービレ、そして《皇帝》第2楽章の深みや第3楽章に移る高揚の予感などが生き生き伝わってきた。ホールを満席にしたこの日の聴衆も素晴らしかった。ペダルが外れるといった楽器の不調にも穏やかに構え、音楽に聴き入っている集中力が気配として伝わってくる。《皇帝》が終わると、「これは編曲も素晴らしいということだ。オーケストラとの演奏のように聴こえたよ」などという年配の夫婦の会話が自然、耳に入ってくるのだった。山田和樹の指揮した《ミサ・ソレムニス》に続くホールの開館30周年企画であり、企画者の熱意にも思いがいった。